

書評

開発コンサルタントの桎梏

佐藤光男

パーマネント・エキスパート
(株) 国際開発アソシエーツ

松村美香著、2012年、『利権聖域：ロロ・ジョングランの歌声』、角川文庫

読み始めたら止まらなくなり、一晩で読み通してしまった。ODA関連でのインドネシア訪問の経験は無いが、その他の国での経験などからの既視感があり、ストーリーを追う楽しみを満喫出来た。

冒頭の「余震」の章、従兄弟の葬儀からの物語の導入部で引込まれてしまった。物語に出てくる新聞社と雑誌は朝日新聞とAERAを彷彿をさせる。フリーフォト記者の登場、汚職構造・国会議員への還流の話などは、筆者の経験より一昔前にはあったことを想像させる話は、韓国などでもあったが、真偽のほどは不明である。しかしそれなりに尤もらしさを備えており、それに色々な立場からの正義の葛藤が出て来て、コントラクターが殺人の黒幕であってもおかしくない話したが、筆者の経験の範囲からは良く判らない。

海外出張での到着時、ホテルの光景、支局でのやりとりなどフムフムと頷きたくなることばかり。というか、筆者の時代に比べると日本が豊かになったのか、かなり上のグレードの環境が描かれている。我々の時代、1960-70年代の出張風景では社長でも二流三流ホテルで我々と一緒に泊まって食事をしていた。

「ロロ・ジョングラン」の章で歳田礼子が登場。新聞社内の人間関係やNGOなどで活躍し、中瀬記者に見いだされて難民キャンプ便りで一躍脚光を浴びるが、記者仲間からの嫉妬により下ろされてしまうレイコ。次の「ペン語る」の章を過ぎて、「定義なき正義」の章で定番の青年海外協力隊、業者、談合、裏金、商社、コンサルタントが登場する。

「時の交差点」、「空の道しるべ」の各章に息もつかせぬ勢いで書き進んで行く力量が素晴らしい。こちらは読むだけだが、かなり疲れた。又、一概に割り切れない現地の事情、日本の業者の暗躍など、筆者には未だ未消化のまま残っているものもかなりある。それでもエピローグまで持っていき完結させる力は大したものだ。

日本のマスコミは特殊部落だ。彼等は官庁、国会と記者クラブという独占体を通じてニ

ユース、情報の流通を操作出来、実際に情報操作をしたり、(沖縄、慰安婦問題など)、情報を無視する(書かない)ことも多々あり、最近はインターネットの発達により操作もしにくくなっては来ているようだがまだまだ問題含みではある。

一時叩かれまくった商社出身者としては、正義は立場によって変わるもの、というテーマは大いに賛同出来る。本書は新聞社、雑誌社の内部のストーリーであり、良く出来ている。次はマスコミの問題点、官庁の問題点、司法の問題点を扱った話も期待したい。欲張り過ぎだろうか？